

第一回 和のフォーラム講演会

比叡山延暦寺住職

宮本祖豊師 講話録



平成二十七年六月十六日
TKP東京駅日本橋カンファレンスセンターにて

皆さんこんばんは、比叡山から参りました宮本祖豊と申します。よろしくお願いたします。

本日は「和のフォーラム」主催の第一回特別講演会ということでお招きいただき、そして皆さま方、お忙しい中お集まりいただきまして本当にありがとうございます。

皆さんは、比叡山での「千日回峰行」というものをお聞きになったことがあると思います。この千日回峰行は十二年籠山行の中に取り入れられマスコミなどにも紹介されて最近では大変有名になってきました。

比叡山は平安時代に開祖伝教大師最澄上人により人材の養成道場として開かれましたがその中で最澄上人が決まりました規則が「十二年籠山行」といって文字通り十二年間、山に籠って行をするものでございます。しかし、こんにちでは十年、二十年単位で修行するという方は非常に珍しくなっ

てきました。

千日回峰行が派手で『動』の行と言われるのに対して、「十二年籠山行」というのは地味で一つの建物の中に籠って十二年間修業する『静』の行というものです。テレビはもちろん、新聞も週刊誌もラジオもないという世俗と一切関わりを持たない環境で十二年間、伝教大師最澄上人が生きているようにお仕えする行でございます。

私は御縁によりその行をさせていただきました。そのことを通しまして私がどんな思いで生きてきたのか、そこでなにを得られたかをお話して、皆さま方の人生、仕事に役立つことができれば非常に光栄に存じます。

一大決心で比叡山をめざす

じつは、私はお寺の生まれではございま

せん。皆さまと同様に在家の出身です。北海道の室蘭市に生まれ、高校までは普通の学生生活を送ってききましたが大学受験にまず浪人生活ということになりました。

浪人中ですから当然、受験勉強もしますが時間もたくさんありましていろいろな本を読む時間もできます。ある時、ノーベル賞を受けられました湯川秀樹博士の対談が雑誌に載っているのを読みました。そこで博士は「学問というのは一生懸命やればやるほど新しい発見、成果というものが出てくる。しかし、偏見というものもあるわけで、それを打破するためにも学問は一生研究し続けるものだ」と言っておりまして。当時、私は京都大学で宇宙物理学を勉強したいと思っていました。がそれを読んだときに、急に学問に対する熱が冷めてしまいました。もちろん科学も一つの真理でございます。しかしながらもっと大きな真理があるので

はないか、自分は徳を積むような生き方をしてみたいと思いました。そして自分を見つめ直すと、東大に入れるような賢い頭を持つていられるわけでもないし、家庭も決して裕福とは言えない一般的な中流家庭です。その時、自分はずくづく徳の少ない人間だと痛感いたしました。人生を歩み、徳を積みたいたいという思いがだんだん強くなってきました。思い浮かんだのが宗教でございます。

私が住んでおりました北海道室蘭では宗教的な施設といえば神社仏閣よりも教会のほうが多くありました。そこで、先ず教会に行きまして神父さんや宣教師の方からたくさんのお話を聴き、キリスト教の勉強をするようになりました。その中で、ある宣教師から自分は二十代の時に、あることで入水自殺したことがきっかけでキリスト教の信仰の道に入ったのだということをお話

れます。そして、「あなたは熱心にキリスト教の勉強をして詳しくなつたけれども、それは信仰とは別なんですよ。人生の一大事の経験といったものがなければ信仰の道へはなかなか入っていけないものです」と言われました。

私の家はクリスチャンでもないし、私も洗礼を受けているわけではありません。だから、そう言われまして「キリスト教とは難しいものだなあ」と思っていた時に出会った書物がございます。中国で天台宗を完成させました天台大師智顛ちぎんの書いた『魔訶止観まかしかん』という坐禅の指南書です。それを読みましてところ、哲学的で内容もしっかりしていて、さらに実践書として書かれていることに非常に感銘を受けました。これを一生勉強するだけでも飽きないだろう。さらに、この実践をすることでもっと違つた境地が開けるのではないかと思えました。

最澄上人は十九歳で比叡山に上っています。そこで修行するにあたって『願文』^{がんもん}という誓いの文章を書いています。千二百年前の文章でありますけれどもここから非常に澄んだ心が伝わってきました。そして世の中にこんな澄んだ精神の持ち主がいたんだと非常に感銘をうけて、是非こういった雰囲気^{きふん}の比叡山で修業をしたいと思ったわけでございます。

皆さんはお坊さんというと、大体の人はお葬式をする人だと思っています。

けれども比叡山というのは人材養成の道場なのでお葬式というのは一切いたしません。観光などでの収入は予算としてとつてはいますが葬式は行わないのです。そういった比叡山のことや最澄上人のことを両親に説明して、お坊さんになりたいと訴えませんが親としてはそんな精神的なものだけでなくどうして食べていくんだと心配してなかな

か話を聞いてもらえませんか。そして一年、二年と経ちますがどうしても両親を説得できません。

とうとう二十二歳の時、思い切って書き置きを残して比叡山に修行に出ます。二度と故郷には戻らないと一大決心の覚悟で片道切符だけの旅費を持って比叡山に向かいました。



開祖伝教大師最澄上人

師僧をもとめて

そうして、いよいよ比叡山にやってきますが昔とは違い昭和五〇年代の終わり頃では紹介状を持たないこの馬の骨だかわからない者がお寺の門を叩いて修行させてくださいとお願いしたところで「はい、そうですか」と言っ受けて入れてくれる時代ではないのです。

それでも私は根本中堂のご本尊の薬師如来様に「なんとか、お坊さんになれますように」とお願いした後で直接延暦寺の事務所に行きました。そして、「お坊さんになりたいんですけれど」とお願いしましたところ運が良かったのか、仏さまに祈った甲斐があつたのか幸い門前払いにはならず「ちよつと話を聞いてあげよう」ということになりました。

私は是非お坊さんになりたい、坐禅に非

常に興味を持っていることなどの思いを話しますと、それではこの比叡山で一番坐禅に詳しい人に会わせてあげよう。」と、比叡山の西塔という地域で新入社員研修などを主に行っており、在家研修道場「居士林」の所長さんだった堀澤祖門さんという方を紹介してくださいました。現在では八十六歳になり、京都大原三千院の御門主をしております。

その「居士林」へ行きまして、堀澤さんには是非お坊さんになりたい、坐禅をやりたいと申しましたところ、「じゃあ、ちょっと坐ってみようか」と言っていたいただき、四分ほど一緒に坐禅をいたしました。

坐禅が終わって堀澤さんから、「この近くに比叡山で最も清らかな、日本で最も戒律を守っているお坊さんがいるのでその人に会わせてやろう」と連れていかれたのは開祖伝教大師最澄上人のお墓のある「浄土院」

というお寺でした。

堀澤さんに連れていかれたのはもう夕方になっておりましたけれども、その住職でありました高川慈照さんという方を紹介していただきました。そして自分が疑問に思っていること、悩んでいること、坊さんになりたい理由などみんなこのお坊さんに話したらよろしいと言われ、お話をする機会を頂きました。堀澤さんは私がお坊さんになりたい、十二年籠山をしたいと言ったものですから、この高川師の弟子になってはどうかということを紹介してくれたわけですが、その時はなぜここに連れて来られたのかその意図をさっぱり判りませんでした。

私はそこでも自分の思いのすべてを延々と話しました。高川師は私の話をじつと聞いて、一々丁寧にこれはこうなんだと答えてくれました。気が付くと十時間以上一人

ですつと喋っていました。

この浄土院というのは伝教大師最澄が生きていると考えてお祀りしている場でございます。皆さんご存知のように肉体は滅してもその魂が生きているお軸などの尊像を御影と言います。その真の影に侍るといことからこのお寺に仕えているお坊さんを侍真といいます。この侍真職にある人は伝教大師の規則に則って十二年間山を一步も下りずに修行いたします。たとえ、親が亡くなるうとあるいは大病になると一切山を下りることは許されぬ。ひたすら伝教大師最澄が生きているように十二年間仕える修行です。

伝教大師はなぜ十二年間と決めたかといいますが、お経の中で「蘇悉地經」という密教のお経があります。その中に最下鈍という一番レベルの低い者でも十二年間一つのことを行えば必ず一験を得ると書かれて

います。「駿」とはしるしのことです。これを基に伝教大師は比叡山で修業するお坊さんは必ず十二年間山に籠って修行しなさいと決めたわけです。今日、皆さんは違った形でこの十二年という修行をしております。それは何かというと、六三三制という小学校六年、中学校三年、高校三年の教育です。これは当時の政府が一人前に人間になるには十二年かかるという伝教大師のおしえを考慮したといえます。

さて、浄土院で滔々^{たうたう}と話した数日後に高川師から堀澤師に連絡がいきまして、「あんなに喋る男は嫌いだ」と言われ、堀澤さんが考えていた弟子の話はなくなってしまったんです。

そして、次に紹介されましたのが、比叡山で千日回峰行という厳しい行を二回行いました酒井雄哉阿闍梨^{さかいゆうさいあじやり}です。

今度は電話していただき、丁寧に履歴書

を書きまして弟子にしてもらおうようにお願いに行きました。当時、酒井阿闍梨は一回目の千日回峰行を満行した後で、二千日に向かっている千二、三百日の頃でありました。

ご承知の方もおられると思いますが酒井雄哉阿闍梨というのは特攻隊の生き残りと言われます。戦後いろんな仕事や商売をやったのですが、次々に失敗いたしました。四〇歳を過ぎてから、人生を立て直すためにお坊さんの道に入っています。ですから自分の弟子、後継者にする者は一度社会で苦労したことがある人間でなければ受け入れないという信念を持っています。

当時二十二歳の私に「お前はその年ではない何ができるんだ。車の免許はもっているのか。お父さんは何をしているんだ。」と尋ねられました。私が免許はないと答えると、じゃあ、父親が大工というならお前

は家でも建てられるのかと聞かれます。私はそれもできないと答えますと、「そんな者が坊さんになっても何が人の役に立つんだ。いつペン社会に出て苦労してこい。三十歳になってもまだ坊さんになりたいという気持ちがあるんだったら、また私のところに来なさい。」と言われました。

その後、何回も弟子にして欲しいとお願いしたのですが一本筋の通った阿闍梨さんです、その信念は曲げられませんでした。そこで堀澤さんの元へ戻り報告しましたところ思いがけずに「それなら、ちょっと面倒を見てあげよう」と言われ小僧にもならない「小僧見習い」ということで堀澤さんのお寺にしばらく預かっていただくことになりました。

その時、堀澤師から「世間では一宿一飯の義というのがあるのを知っているか。ご飯を食べさせてやろう。その代り、自分が

できることは何でもしなさい。」と言われま
した。しかし、自分にできることは何にも
ありません。朝から晩まで境内の掃除と草
抜きをやりながら坐禅のしかたや、お経の
詠み方を習います。

ところがひと月も経ちますとご飯の心配
はないものの、この先本当にお坊さんにな
れるのだろうか、はたして僧侶としての道
に入れるのだろうかといった心配がどんど
ん大きくなってきました。その気持ちを堀
澤師に話しましたところ、「そんな考え方で
はここに置いておけない。今すぐ出て行
け。」と言われ、お寺を出されることになり
ました。当時は何が悪かったのかぴんと来
なかつたのですが出て行けと言われたこと
で故郷に帰るお金もありません。わずかに
残っていたお金で、以前行きたいと思っ
ていた奈良の大峰山に向かうことにしまし
た。

私が家出同然で出てきたのは夏の終わり
でしたから半袖の服に、持ってきたのは紙
袋に詰めたわずかな下着と洗面道具だけ
です。堀澤師僧は初めて会ったとき、こいつ
は夜逃げをしてきたのではないかと思っ
たというのでたちでした。大峰山は一七〇〇
メートル以上の高い山ですから一〇月も過
ぎると朝晩は非常に寒く、吐く息は真っ白
になります。雨が降ってくる中ではとても
野宿することはできません。これではさ
がにまずいと登るのを思いとどまり最低限
のものを整えようとアルバイトをします。
そしてそのお金でなんとかテント、リュック
サック、食糧を用意して大峰山に籠りま
した。ひと月ほど坐禅をしながらこれから
のことを一生懸命考えますがどんなに考え
たところで、お坊さんの世界は教えてくれ
る師僧がなかつたらこの道を歩むことがで
きません。頼りになるのはやはり堀澤師で

す。そこで、是非もう一度チャンスを与え
てくださいとお願いしましたところ、「じゃ
あ、来なさい」と言われ堀澤師のもとに戻
ります。そして紹介されたのが、一番初め
に紹介されました伝教大師最澄がおられる
浄土院です。

ご縁がもたらした浄土院での修行

なぜ、またここを紹介されたかという
と、今までこそ比叡山はドライブウェイなども
整備されまして、どなたでも誰でも参り
することができますが明治になるまでは女
人禁制の厳しい修行の道場でございます。
浄土院はその中でも千日回峰行と並んで
厳しい修行をするお寺です。当然女性は
おりません。食事の賄まかないなどは寺男といわ
れる者がいたしますが当時、浄土院におら
れた寺男は七十歳くらいになっておりまし

た。体力的に比叡山の厳しい気候についていけないといって辞めてしまいました。さらに寺男になろうとする人もおらず非常に困った事態となりました。ちょうどその時、私の話がありましたので、「お前、寺男のような仕事で良かったらやるか」と言ってくれたのです。私としては最後のチャンスだからと思い、二つ返事でお受けしました。こうして浄土院で再び小僧見習いとして若いお坊さんと一緒に修行していくこととなります。

浄土院には伝教大師最澄の月命日の四日には比叡山の一〇〇人近いお坊さんの中から五人ほどが必ず法要に来られます。また、六月四日の伝教大師最澄の命日「祥月忌」には天台宗トップの地位であります天台座主はじめ、錚々たる高僧二〇人が集まって法要を執り行います。こうして年間を通してたくさんのお坊さんが来られるのですが、

見慣れない私を見ると「お前はどこから来たんだ、名前は何というんだ」と聞かれます。私はお坊さんになりたくてここで小僧見習いをしていまずと言うのですが、誰一人として弟子にしてやろうという方はおりません。お坊さんの世界というのは師僧が見つかって初めて成り立つ世界でございますが、一年、二年経つてもなかなかお声がかかりません。その中で一回だけお声がかかったことがあります。しかし、縁がなかったのか結局ダメになってしまいました。そして二年を過ぎた頃、もういっぺん堀澤師にお願いをしに行きます。

それまでも機会があれば何度もお願ひしていましたが、弟子をとるといことはその人間のすべての面倒を見ることとなります。三食食べさせるのはもちろんのこと、大学に行かせるなど、すべての面倒をみることになるわけです。よほど経済的な余裕

がなければ難しいことです。堀澤師は多くのお弟子さんを抱えておりましたから、私まで弟子に加える余裕はなかったのですが熱心に何年もお願ひするものですから面倒を見ようと言ってくれました。こうしてようやくお坊さんになれることになったのですが、堀澤師から「お釈迦様の時代から弟子になる者は両親の許可が得られなければならぬ」と言われます。私は家出を出てきたものですから、これは非常に難題でしたが故郷に帰って全精力を注ぎ、なんとか両親を説得することができました。

そして、堀澤師の寺に家族全員が集まることになり、ようやく正式にお坊さんの世界に入ることになりましたが、お坊さんの世界に入ったといったところで、じゃあ明日から十二年籠山の行に入れるものではないです。

十二年籠山行が決められたのは平安時代

のことであります。その後、鎌倉時代を経て僧兵といったものが出てきて織田信長の焼き打ちに遭い全山焼失となります。これが復興されますのが江戸時代徳川家光の頃です。そして江戸の元禄時代にこの浄土院において「十二年籠山行」を復活させようといった気運が起きてきます。

その頃は気持ちのある者だったら、たとえ小僧の身分であっても修行に入ることができたのですが今日ではさまざまな条件があります。比叡山で「十二年籠山」の修業をするということになればマスコミからも注目を浴びることになりますし、いまさら小僧の身分で修業ができるというわけにはいきません。住職でなければなりませんから師僧には学校にも行かせていただきながら経験を重ねて、平成六年に比叡山の住職の資格を得ることができました。

終わりの見えない試練「好相行」

この十二年籠山は厳しい行ですから願書を提出して会議にかけ、それが住職全員に認められて初めてこの行ができます。

堀澤師は戦後初めてこの浄土院にて十二年籠山をいたしました僧であります。師僧は行の前に故郷の新潟に帰り、両親に向かってこれから厳しい戒律を守っていく行に入るのを命を落とすかもしれない、もう会えないかもしれない、みずさか水杯を交わしてお別れの儀式をしてきたというのです。

私の場合は、平成の時代でありましたからそういった儀式はしませんでしたけれどもやはり故郷の北海道に帰り、もう二度と会えないことを両親に伝えながら十二年籠山行に入っていくことになりました。

しかし、その前に伝教大師最澄に仕えるためのテストがあります。仏教のテストな

のでペーパーテストではありません。「好相行」というテストです。

大変な修行をされて悟りを開いた、生きた伝教大師に仕えるのですから、そこに侍るお坊さんも心を清めるといふことで懺悔の行をするんです。

比叡山の行で一番厳しいと言われている千日回峰行と並ぶ十二年籠山行に向かうわけです。千日回峰行はご存知のように山頂山下、一日三〇キロ、二六〇以上の神さま、仏さま、木や草、石に至るまで八百万の霊を拜んで歩きます。毎日真夜中の二時に起きて死装束と言われる真っ白い衣を着て提灯一つで真っ暗な中を出て行きます。比叡山の行の特徴は一度行に入ったらどんな理由があっても退くことは許さないという一〇〇年前から続く「行不退」の精神です。

千日回峰行では毎日、暗いうちから山道を歩くわけですから、足を踏み外して捻挫

をすとか崖から転げ落ちて骨を折る可能性も非常に高い。しかし、どんな理由があっても退くことは許されません。私は歩けませんから今日は休みますということは許されないのです。

もし歩けなくなったら、その場で即刻死ぬというのがこの比叡山の不退の行ですから千日回峰行者は常に自決用の短刀を腰に差し、さらに首吊り用の紐も必ず腰に巻いて歩いています。ところが人間という者は決死の覚悟で歩けば、やはり怪我をしないものです。こうして代々の行者は千日を満行しております。

そして、千日回峰行で一番の難関というのは七〇〇日を終えたときの「堂入り」といつて断食、断水、不眠、不臥。飲まず食わず、眠らず横にもならずに一〇万回不動明王の真言を唱え続け九日間お堂に籠る行です。人間というのは水を飲んだら何とか

生きられますが、飲まなかつたら一週間で亡くなるという科学的な説があります。四日を過ぎると瞳孔が開いて死臭が漂い死の直前まで行くというこの過酷な行でさえも九日間が終わったら満行となります。

堂入りを終えた千日回峰行者は、その後八〇〇日から一日六〇キロ歩く。九〇〇日からは京都の神社仏閣を拝むため足を延ばし一日八十四キロも歩きますが、千日の期限を過ぎたら満行となります。

ところがこの「好相行」には期限というのはない。心が清まって目の前に仏さんが立つか、自分が死ぬかの二つに一つしかありません。

仏教で一番丁寧な礼の仕方は両肘、両膝、額を床につけて祈る「五体投地」と言う拝礼です。皆さんの中にもテレビでチベットのお坊さんたちが大地に身を投げ出して礼拝をしているのを見た人がいると思います。

それに近い形で日本でも行われます。

好相行では過去千佛、現在千佛、未来千佛の仏さま全部の名前が書いてある「三千仏名経」というお経を詠みながら一佛、一佛に対して焼香をし、お花を献じて「南無〇〇佛」と言っつて五体投地を一日三千回いたします。元気な時でも大体十五時間かかります。

これを心が清まって目の前に仏さまが立つまで続けるのですが何回、何十回、何百回礼をしても私には見えてこない。何千回、何万回続けても見える気配がない。それまでの先輩方は大体三カ月ほど、回数でいうと大体二十五万回ほどで目の前に仏さまが立つと言っていますが、私には百日を過ぎても一向に見えてきません。先輩からは煩惱の多いほど汚れが多いから見えてこないんだと言われます。もちろん自分の煩惱なんて見えるわけではありません。私は在家の

出身でしたから漠然とした思いで、見たこととはないけれど仏さまや神さまはいるんだろくらい信仰心でお坊さんの道に入っただけです。

こうして毎日三千回の五体投地をやりますので当然疲れが出てきて時間もだんだんかかるようになってきます。三度の食事、トイレ、そして沐浴ちくよくといって水をかぶって身を清める時以外は二四時間お堂に入って礼をします。やがて百日も過ぎると体力が衰えていってどんどん首が細くなってきます。眠ることもできませんから昼はまだいいのですが夕方にもなると目が疲れてきて仏さまの名前が書かれている経本の字に焦点が合わなくなってきました。身体はフラフラしてきます。周りで見ている先輩たちはもうこれ以上続けるのは無理だろうという話になってきます。

死を感じながらの修行

こうして六か月過ぎ、七か月、八か月、九か月過ぎてても一向に仏さまが見えてこない。周りからはもうどうしようもない。命が危ないと言われ、とうとうドクターストップがかかって一時中断ということになりました。

しかし、好相行は仏さまが見えるまでやる行ですので多少の体力の回復を待つて再開ということになります。再開した初めのうちはまだ勢いもありますが、やはり三か月くらい経っても見えてこない。最初のころは師僧、あるいは兄弟子そして指導者たちが頑張れと言って応援してくれます。世間にも知られている行ですから、何か月やっても見えないとなってくると、師僧、兄弟子といえどもそれぞれの立場というものがありません。死ね」と言ってくるんですね。

それしか格好のつけようがない。

ところが人間、死んでくださいと言われても「はいそうですか」と死ぬるものではないものです。こうして決死の覚悟でもってさらに行を続けていくのですが一向に見えないままとうとう半年が過ぎて冬になります。



冬の浄土院

比叡山の中でも浄土院の辺りは一番寒い場所です。冬はマイナス一五度以下にもな

る中で裸足で床の上に立ち、朝から晩まで「南無〇〇仏」と言つて一佛々に礼拝をしていますと足の油分は無くなり踵が割れて血が出てきます。足の爪先も割れて血が出てきます。ついには土踏まずも割れて血が出てきます。体力がすっかり落ちているので免疫力も無くなっていて、ばい菌が入って化膿してきます。こうなつてくると針の上に立つているような痛みです。さらに手の指、手の甲、手の掌の筋も割れて血が出てきます。末端の指先などから冷たくなつてきて足は股関節まで痺れて何の感覚もなくなつてきます。こうして肩まで冷たくなつてきますが頭は非常に冷静でいられます。」「ああ、これで心臓まで冷たくなつたら止まるんだな」と判りますが自分から行をやめるということは一切許されないのです。

師僧が様子を見に来ると顔は真っ白で蠟

人形のように無表情で何の反応もない瞳孔が開いた状態です。そのうちに舌の感覚も死んできて味も全く分からなくなつてきます。夜も寝ませんから目がかすんで見えなくなつていきます。眼がいかれますと次は眼とつながっている耳がいかれてきます。平衡器官をつかさどる三半器官がいかれて床が四五度に傾いて見えてきますので立つとしてもフラフラして立つていられなくなる。とうとう周りから死ぬんではないかと言われて二度目のドクターストップとなりました。

緊急事態ということ、ふもとから医者が上がつて来まして診断をされ、血液検査の結果を待つということになりました。結果は、もう少しだけ生きられるだろうということ、三度目に挑んで、ひと月半経った頃ようやく目の前に仏さまを見ることができました。

ところが私の場合、約三年に亘つて一度も横になつて寝たことのない過酷な行でしたから疲労困憊して幻覚を見たのではないか。あるいは思い込みで観たと勘違いしているのではないかという意見も出てきます。指導者に仏さまが現れた状況を伝えてそれが「本物」の仏さまという判定をもらえなかつたら満行したとは言えません。

好相行を満行した堀澤祖門師は、「仏さまというのは肉体の眼で見ることではできないもので心の眼で観るものだから、目の前に仏さまが立つた時に目を開けても、目をつむつても目の前に仏さまが立っていないければ本物とは言えない。開けてたら見えるけどつむつたら見えないのは偽物だ。またお軸に描かれているような平面的な仏さまであつたらそれは仏さまとは言わない。生きているような姿で光を放っている。」と語っています。そして私が観た仏さまは間違

なく本物であると判定されたのです。

しかし、まだ満行とはなりません。当時、天台宗全国三千寺のトップでありました渡邊恵進わたなべえしん天台座主ざいすにこの話をいたしました。座主はこれまでいくつも聞いていた行者の話を考えてうえて「よろしい」と言われました。

いよいよ十二年籠山行に入る

こうしてようやく「好相行」が満行となつて十二年籠山行ができることになったのです。「好相行」が終わりますと日を改めまして、比叡山の戒壇院というお堂で自ら戒律を守る自誓受戒の儀式をいたします。その後、天台座主から浄土院で生きた伝教大師に仕えてよろしいという命令が出され、翌日から伝教大師に仕える十二年籠山行に入ります。

この行は、毎日朝三時半に起きます。そして四時から一時間のお勤め（読経）をして五時になりますと、伝教大師最澄上人に生きているときと同じように食事を差し上げます。朝はお粥、お漬物、佃煮をお膳に乘せてお供えします。これが終わりますと伝教大師が自ら彫つたと言われる阿弥陀様のご供養をします。

そして比叡山というのは京都に都があった時から国家の安泰、天皇陛下の安泰を祈る祈祷の道場です。国を守るためのお経とこのがあります。護国の三部経と言って法華経ほっけきょう、仁王経にんのおうきょう、金光明経きんくわうめいきょう、さらに六百巻の大般若経だいはんにやんきょうという長いお経を毎日一巻ずつ詠みます。今日でも国家安泰、天皇陛下の安泰そして世界平和のために毎日祈祷しています。このお勤めを二時間半ほどいたしますして、十時になると昼のお食事となるご飯、味噌汁、野菜の精進料理をお膳に乗せ

て伝教大師に差し上げます。そしてまたお勤めをします。昼になると境内の掃除をして夕方四時のお勤めをして五時に門を全部閉めます。

これで一日のスケジュールが全部終わつたかというところ、そうではありません。これから仏教の勉強や足りない分のお勤めをしたり、坐禅あるいは写経などをして十時に休みます。そして次の日、また三時半に起きて同じことを繰り返します。これを三六五日、毎日同じ時間に同じことをします。正月だから、祭日だからといってお休みなどは一日もありません。それをさらに十二年間も続け続けることで一歩一歩悟りに近づいていくのです。「継続は力なり」これが伝教大師の考え方です。この伝統が二〇〇〇年経つた今日でも行われているのが比叡山の十二年籠山行です。

光り輝く世界を感得する

みなさん、「おくりびと」という映画をご存知でしょうか。この原作者、青木新門さんの親友であるお医者さんに、ある時がんの再発が見つかり余命が告げられます。ご自身も医者ですのでこの宣告で自分が何年何か月後に亡くなるんだという確信をして死を受け入れたということです。そしてこの病院から自宅に帰るとき、眼に見えるすべてのものがありがたく感じられたということです。

実は、それと同じ光景が好相行をしている最中にも出てきています。当時、食事を済ませてお堂に戻る廊下からわずかに外の景色が見えました。お堂の建物であったり、屋根であったり、木であったり草であったり、石であったり、これらすべてがダイヤモンドのようにキラキラキラと輝いて

何時間見てもうつとりして飽きないくらい美しいんです。こうしたことが何日も何日も続きました。また、行の最中に身体の中から泉のように滾々とどうしようもない強烈な悦びが溢れて溢れてくるのです。あまりの悦びでそこらじゅうを駆け走り回りた。それくらい強烈な悦びが湧いてくる。これが何カ月も何カ月も続くんです。だからこそ、もう少しで仏さまが目の前に立ってないかと思っただけ好相行が続けられたのです。

じゃあ、そのあとの十二年間は毎日毎日同じスケジュールで退屈だったでしょうと言われることがあります。人間というものには自然とともに起きて、そして陽が沈むとともに一日が終わる。そんな自然の中に生きるうえで食べるものは完全な精進料理です。肉、魚はもちろんのこと、臭いの強いタマネギ、長ネギ、ニラ、ニンニクなどは

一切食べません。カツオ節も使わず、水も湧き出ている水を使います。こうして自然とともに生きていくと人間は非常に生き生きとしてくる。毎日、自分が生かされているのだということを日増しに感じていきます。その中で仏さまを感得することもありますが毎日目の前に立つわけではありません。当然、体調の悪い日もあります。その時には目に見えない神さん仏さんそして、毎日お仕えしている伝教大師最澄の御加護というものを非常に感じます。これがあつて初めて十二年間満行することが出来ます。そういった中で仏教の正しい部分を勉強していきます。

目の前にある壁は自分の中にある

皆さんに是非伝えたいのは、仏教は難解なものではなく、自分が行き詰った時にど

うするのかということ。人生の中、あるいは仕事をされている中でいろんな壁にぶつかると思います。同じように私も好相行でもう二度と立ち上がりたくないほど疲労困憊しました。責任を取って死ねと言われるなかでどうしてそれを越えたかということ、その立ち上がりたくない中で“あと一步”だけ“あと一回”だけ礼拝をしようといった気持ちでいました。

人間はどんなに体力がなくて動けない状態でも、あと一回ぐらいはできるものなんです。こうして一回ができますと、もう一回だけやろうと思う。するともう一回できる。これを三度続けると、なんだ、肉体的にも精神的にも限界だと思っていたのは自分が創っていた壁だというのが判るんです。一〇歩も二〇歩も先にある壁ではない、いつか見える仏さまではない。あと一步だけ全力で立ち向かおうという気持ちで一步、

あと半歩踏み出した時にこの壁が破れる。その覚悟さえあれば人間というのは前に進めるんだということ。皆さん方に伝えたいのです。

現代では皆さんは非常に頭を働かせています。私も受験戦争の時代に生きていました。ときは頭を使う訓練しかしていません。

ところが人間というのは不思議なもので、好相行で毎日朝から晩まで眠らずにいると頭が真っ白になるんです。その時、初めて思考能力が止まり、心がどどん真っ白になっていって我の無い“無我”の境地になります。そして初めて仏さまというものが見えます。この能力は全員が持っています。この能力が再び開花して感得するということができるのです。

かつての高僧たちは、いざ頭を使えば哲學的にも誰にも負けなくらい賢い能力を発揮することができ、脳の働きを止めよう

と思つたら一瞬のうちに思考能力を止められるということができて聖者と言われていきます。私は人間というのはこの両方ができて初めて精神的にレベルアップするということ。ことを理解したわけです。

仏教は二五〇〇年前お釈迦さまが悟りを開いたときから始まっていきます。そのインドにおいては仏教以外にもたくさんの方が出ています。ヒンズー教の聖者、あるいはキリスト教の聖者も出てきます。

レベルアップの極意

ある信者さんがひとりの聖者に会うことができて、こんなことを尋ねたといっています。「わたしは頭も悪いし信仰心も薄い。けれども人間として生まれたからには精神レベルを上げたい。ついには神や仏を悟りたい。どうしたらいいだろう。」

その聖者は、徳の高い人に近づきなさい。必ずあなたの精神レベルを少しずつ上げていって、ついには神さま、仏さまを悟らせるまでもっていつてくれるであろう。」と答えます。

「では、そんなご縁がなかったらどうするのですか。」と聞きますと、「もう一つ方法がある。聖地霊地を訪れなさい。世界にはたくさん聖地霊地がある。仏教以外でもキリスト教の聖地、ヒンズー教の聖地。神道にも聖地があります。そこはたくさん修行僧が修行をして悟りを得た所である。目に見えないけれど独特の波動が流れている。そこに行けばかならず精神レベルを上げるチャンスを得ける。」というのです。

現に、私の知っている人で全く神、仏を信じないという人がインドの仏跡をめぐるツアーに行つて、それがきっかけとなり、とうとう熱心な仏教の信仰を得たという人

がいます。こういったことが必ずあります。

一隅を照らすこととは

そして、皆さん方にお伝えしたい「一隅を照らす」という言葉があります。この一隅を照らすというのは実は伝教大師のオリジナルの言葉ではありません。中国の故事からとつた言葉です。

一隅に対して千里万里を照らすとは、中国の広大な地域を治める武将がいて、さらにその人たちの中から優れた者が將軍となる。そのような大人物が出てくるうちは中国は安泰だといった話です。

ところで伝教大師最澄上人は人材養成の場所として比叡山を開かれました。その中に自分のお弟子さんの慈覚大師圓仁、そして智證大師圓珍、元三慈恵大師良源。さらに鎌倉時代になりますと法然上人、親鸞聖

人、道元禪師、栄西禪師、日蓮聖人、一遍上人、皆さんこの比叡山で数年から長い人で二十年以上修行いたします。そして、その教えをもつて一宗一派を開いていきます。ですから比叡山は日本仏教の母山と言います。

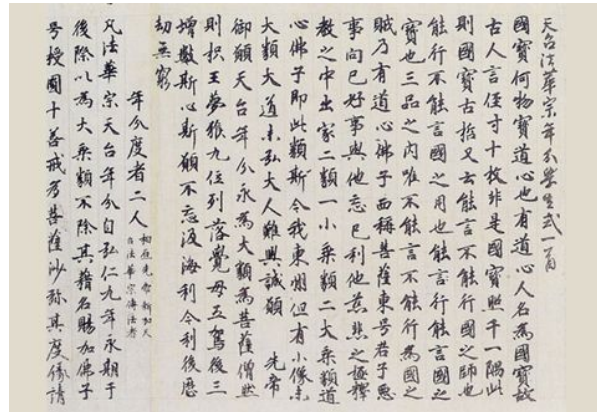
その比叡山で一番人が多かった平安時代後期には三千人のお坊さんが修行していました。その中で後に大師号をいただいたような人はわずかだけです。じゃあ、みんなが大師号をいただく大人物になることを望んでいたかとそうではない。一隅を照らすということは「自分のポストにベストを尽くす」ということです。千里万里を照らすような世界的な有名な大人物にはなれないかもしれないけれども、自分のポストにベストを尽くせば必ず自分の周りの五人、一人、二人、三人といった人たちに光を投げかけて、あるときは立ち直らせ、あ

るときには癒してあげることのできる人間に必ずなれる。そういった人間を千人、万人、百万人創る。これが伝教大師の考え方です。『自分のポストにベストを尽くす』

という一隅を照らす人物をどれくらいこの日本に作っていくのか。これを目標にしてこの「一隅を照らす」という言葉を述べたのです。そして今日天台宗はこれを標語として全日本、世界に展開していつております。

それぞれの組織でみんな社長さんのような人だったら会社は成り立ちません。当然、部長さん、課長さん、そして平社員もいなければなりません。演劇にしてもみんなが主役では困ります。脇役もいて、縁の下力持ちとなる見えないところの小道具係、照明係がいて成り立ち、しかもそれぞれを受け持つ人が自分のポストにベストを尽くしてはじめて素晴らしい一つの演劇、

一つの組織、そして一つの国、さらに全世界となっていくのであります。このことを皆さん方の心の中に入れてほしいのです。



伝教大師直筆の『山家学生式』一部（延暦寺蔵、国宝）

両親に感謝するところ

最後にもう一つ皆さん方に伝えたいことがあります。

先ほど言いましたように、この仏教は

釈迦さまから始まっています。本屋さんに行くと般若心経の解説書だけでも何十冊も並んでおりますが非常に難しく書いているものが多い。しかし、お釈迦さまはそんな難しいことだけを言ったわけではありません。お経の中でお釈迦さまは、「何回も何回も生まれ代わって、徳を積んでいってとうとう最後に悟りを開いた。人間や動物の時も常に産んでくれた両親に対して親孝行をすることによって私はついに悟りに至った。だから国が違おうが人種が違おうが親孝行をするところには常に私は加護をする。」と言っています。非常に感動的な言葉だと思えます。そしてこの親に感謝するということで最近私はこんな感動する話を耳にしました。

ある会社の社長さんが、社員一人一人がお客さんから感謝されるような立派な人間になって欲しいと思ったそうです。そのた

めに自分には何ができるのかと考えたとき、お客さんから感謝される以前に、まず社員一人一人が両親をはじめ多くの人に感謝できる人間であつて欲しいと願いました。そこで思いついたのが入社試験の機会でした。たくさんの方が集まる中、最後に社長さんが出てこられて質問をしました。

まず初めに、「あなたの方の中で、子供の時からこれまでお母さんの肩たたきや肩もみをした人はありますか。」と訊ねました。すると全員の学生の手が挙がつたそうです。次に、「それでは、お母さんの足を洗つたことはありますか。」こう訊ねたときには一人も手が挙がらなかったのです。

そこで、この社長さんは「今日から三日間の猶予を与えますので、これからお母さんの足を洗つて、私にその報告をしに来てください。それで入社試験は終りで合格になります。」と話しました。

そんなことで受かるのだつたら簡単なこ

とだと思つて学生たちは帰つていきます。ところが、ある男子学生はいざお母さんの目の前にすると、「足を洗わせてくれ」とはなかなか言いにくい。言おう、言おうと思ひながらお母さんの後をついていく。普段そんなことがないものですから、お母さんの方が気味悪がつて、なんかストーカーみたいで気持ち悪い、気でも狂つたのかと心配します。それでも、言おう言おうと思つてお母さんの後をついていく。とうとう丸二日間追い回した拳句に「お母さん足を洗わせてほしい」と言つてお願いしました。

ところが普段親孝行をしたことがないものですから、お母さんのほうが「なんだ、今頃親孝行がしたくなつたのか」と冷やかにして「ウン」と言つてくれない。しかし、息子が何度も何度も頼むものですから渋々承知をしてくれてようやく縁側で足を洗う

ということになりました。

息子はタライにお湯を組んできて足を洗おうとしてお母さんの足を触つた時、足の裏がざらざらして非常に荒れていることを知ります。子供の時から光景が走馬灯のように思い浮かびました。うちは小さい時にお父さんを亡くして、お母さんが女手一つで兄貴と私を一生懸命育ててくれた。その結果がこの足の裏の荒れているザラザラなのだということを思つたときに思わず胸が詰まり、お母さんに「長生きしてほしい」と言つたそうです。それまで息子が親孝行したいことを冷やかしていたお母さんは、その神妙な声を聴きまして、今までなり振り構わず子供たちを一生懸命育ててきて本当に良かった、立派に育つたと思わず胸が詰まつて涙がぼたりぼたりと頬を伝わり落ちます。その涙が足を洗う息子の手に落ちると、それに気が付いた息子は泣きそうに

なるのを堪えて、一言「お母さんありがとう」と言つて涙を見せないように二階に駆け上がった。この出来事を社長さんに翌日報告に行ったそうです。そこで、自分はいままでたくさんの先生からたくさんの教育を受けてきましたが、こんな素晴らしい教育を受けたことはなかったと言つたそうです。

その時、その社長さんは「その通りだ、君は一人で大人になれたのではない。両親はじめ多くの人達のおかげでもつてようやく大人になれたんだ。私も数十年前に新入社員としてこの会社に入り、多くのお客さんからお叱りを受け、先輩から注意を受けながら今度は一人前の社会人にさせてもらった。君もこれから新入社員となつて多くのお客さんからお叱りを受け、先輩からも注意を受けて一人前の社会人になっていくであろう。その時に決して自分ひとりです。

つたのではないということをしつかりと覚えていてほしい。」

こう社長が言つたときにこの学生は感謝の心を忘れないことを痛感したというのです。

みなさんご存知でしょうか。三千年前のエジプトの遺跡で見つかった当時建築中の建物のいたずら書きのなかに「今どきの若いものは」と書いてあるということです。私ももう五〇歳半ばになりました。いまは師僧が、かつていた居士林で新入社員の研修を指導しております。その中において、考え方が違う、行動がまるつきり違うというのを見ると「ああ、今どきの若いものは」と思うことがなんぼでもあります。その時にこの話を思い出しました。

どんなに世代が変わろうとも、親があるいは大人がちゃんとした言葉で子供たちに言葉を投げかければ、必ずどんな子供でも

反応して、人間として一番必要な親に対する感謝、人に対する感謝。これは必ず芽生えてきて忘れないものだということをつくづく痛感した話でありました。

皆さん是非、若い人たちにその感謝の心を起こさせるように家庭でも会社でも声をかけてほしいと思います。

本日はご清聴ありがとうございました。

